



「滑空班予科練入隊者壮行記念」(昭和 18 年夏)。滑空班より甲種 13 期生として入隊する大塚嘉孝氏(中 43 回・2 列目左より 5 人目)、鶴田重郎氏(中 44 回・2 列目右より 6 人目)、萩原藤之助(中 45 回・2 列目左より 3 番目)と滑空班達。2 列目左より 6 人目は入江信太郎先生、最前列左より 6 番目は戸張礼記氏(中 45 回)。(戸張礼記氏より提供)

### 霞ヶ浦(その 16) ~滑空班から戦いの空へ~

1941(昭和 16)年 5 月 22 日に誕生した土浦中学滑空班。大空を鳥のように飛ぶ夢を抱いた班員たちのなかには、その夢の実現と救国の思いで予科練を志願し、入隊する者もありました。今回は滑空班から予科練を経て、戦場に赴いた 3 名の先輩たち(中 43 回大塚嘉孝氏、中 45 回飯島福男氏・戸張礼記氏)の戦いの軌跡をたどってみます。

## 第 2 郡山航空隊第 1 次特攻隊

大塚(旧姓大熊)嘉孝氏は中学校 43 回卒。1943(昭和 18)年春、5 年生になると滑空部主将を務め、毎日校庭を占領して滑空訓練に明け暮れていました。卒業半年前の同年 10 月 1 日、土浦海軍航空隊に入隊、「第 13 期甲種飛行予科練習生」を命じられました。10 ヶ月の教育期間中の 1944(昭和 19)年 6 月には、写真家土門拳が土浦海軍航空隊の予科練生と起居を共にしながら、予科練生の生活や訓練生活について写真撮影を行っていました。同年 7 月 25 日に卒業した甲種 13 期生は全国の練習航空隊に散って行きました。13 期生 1928 名中首席で卒業した大塚氏は「第 39 期飛行術練習生」として陸上機専修となりました。8 月 1 日からは谷田部海軍航空隊で飛行作業、訓練が開始され、12 月に飛行練習生教程を終了、実用機教程へ進むはずでしたが、航空隊ごと山形県の神町航空隊(跡地は現在山形空港となっています)へ移動し基礎訓練が続けられました。1945(昭和 20)年 4 月 9 日に第 1 次特攻隊要員 13 名に選抜され、同年 5 月、第 2 郡山海軍航空隊に移動、全国の各航空隊から集結した同期生と特攻訓練を開始しました。当時、前線では熟練搭乗員が次から次へと消耗していった。極端に戦力は低下していました。従って後続兵員の補充は喫緊の要務でした。一日でも早く一人前の搭乗員に仕立て上げて、特攻隊員として前線に送り出さねばなりません。そのために全国各地に配属された 13 期生から最も優秀と見られた 72 名で、第 1 次特攻隊が編成されたのです。この特攻隊は本土最

後の航空特攻隊として(決号作戦)、米軍が本土進攻のときに出撃するということで、93 式中間練習機(赤トンボ)による夜間特攻訓練を主にやっていました。たった一度の出撃で立派に死ぬための訓練の日々を大塚氏は『進修百年』の中で『戦争末期』との題で次のように記しています。

「：：日夜文字通り昼も夜もない訓練に次ぐ訓練。然も死ぬための。不思議に『死』に対する恐怖は感じなかった。いや『死』と言う事実が、自分自身、現実のものとはなっていないかったのかも知れない。軍国主義の教育はマインドコントロールだ。

只、真夜中にふと眼が覚める。『ハテナ？俺はほんとうに死ぬのか？敵の軍艦に自らぶつかって行って、爆弾諸共、木っ端微塵となって死ぬ時、最後の瞬間まで両眼を開けたまままでいられるだろうか？』

満 18 才『死の哲学』なんてある筈もない。『死の悟り』なんてあるわけないじゃないか！何らの解決策も見出せないまま、又深い眠りに還ると明朝も厳しい訓練が待っている。：：」

出撃のための前進基地も決まり、1945(昭和 20)年 8 月 9 日、郡山基地で出撃命令を待つていた大塚氏が、訓練を終えた特攻機を掩体壕に運んだ直後、急襲してきた米空母艦載機 F4U コルセア機のロケット弾の破片が飛行靴の上から左足首を貫通しました。その時の状況を

「：：黒い煙を吐いたロケット弾が地上近くで爆発。一瞬左足にすごい衝撃が走った。ウワッ！飛行靴を脱ぐと、左足小指のつけ根から土踏まずに、破片が貫

通していた。前もって教えられた通りに、大腿部を止血した。痛みは感じない。足全体がしびれている。出血もあまりない。意外と冷静だった。

常識的に『これで俺は特攻には行けない死ななくてすむ。助かった。』とは思わなかった。『特攻隊として出撃できない！先輩のあとを追って死ねなくなってしまう。』と涙が頬を伝った。」と述べています。

左足首の骨を砕く重傷を負った大塚氏は入院、粗末なトンネル病室のベットに無念の思いで横たわっている間に終戦を迎えました。

土浦、松山、鹿児島に同日入隊した 13 期生と 2 ヶ月遅れで土浦に入隊した 13 期 2 次の生徒(彼らは乗る飛行機がなく回天特攻隊と震洋特攻隊に選抜されました)を合わせた甲種 13 期同期生の戦死戦没者は 107 名。現在奈良の檀原神宮若桜苑に全員の氏名を刻んだ「甲種 13 期の碑」が建てられています。

なお、大塚氏が所持していた、土門拳撮影の写真は阿見町予科練記念館に寄贈されています。

### 震洋特別攻撃隊

飯島(若泉)福男氏は中学校 45 回卒。1944(昭和 19)年 4 月、中学 3 年修了で土浦海軍航空隊に入隊、甲種 14 期生となりました。1945(昭和 20)年 3 月、予科練卒業を間近にした 15 日頃、総員集合がかり「特攻要員募集」の話がありました。1000 人位の予科練生が集まりましたが、否も応も無く志願、特攻要員の指定を受け、特攻分隊として別の宿舎に起居し、3 月 22 日、600 人の仲間と一足先に

卒業、「全員帽振れ」の歓呼の中を土浦駅に向かいました(土浦中学の同級生たちも同年3月に4年修了にて繰り上げ卒業となりました)。同月24日、長崎県川棚の訓練基地に着任、5月22日まで震洋艇の教育訓練を受けました。震洋艇は小型のベニヤ板製モーターボートで、船内艇首部に250kg爆薬を搭載し、搭乗員が乗り込んで操縦して目標艦艇に体当たり攻撃を敢行する特攻兵器でした。吃水は30cm程度、トヨタ製のエンジン、バック無し、ギヤ無し、レバーで速度を調整、ハンドルは丸ハンドルで、波浪のある海上では思うように操縦ができませんでした。

飯島氏は同年6月初め、第8特攻戦隊(宿毛に本部)第21突撃隊第132部隊に着任。部隊は士官7名、搭乗員45名(全員土浦からの14期生)、本部付き14名、整備兵31名、基地隊71名(主として応召兵)でした。132部隊は土佐清水市東側の越港(こしみなど)の山腹にある横穴に艇を格納、山腹には15個の横穴が掘ってありました。隊員は数名ずつ民家に分宿し、訓練は空襲を避けて、主に夜間に行われました。隊員は越(こ)しにきて上官から特攻の覚悟を言い渡され、遺書、毛髪、爪などを故郷に送っています。特攻の目標は戦艦ではなく、上陸用舟艇や揚陸艦艇など艦の装甲板の薄いものでした。敵が上陸して来る直前を狙うように教育されましたが、250kg爆薬に敵弾が一発でも当たれば、艇もろとも吹き飛んでしまい、果たしてどれほどの効果があったのか、疑問をはさむ余裕すらありませんでした。

「突撃待機命令」や「突撃準備命令」の

発令が終戦までの間に数回ありました。普段の訓練中は、故郷の風景や学校の事友だちの事などを思い浮かべていましたが、突撃準備の待機中は穴の中で艇に乗り、このまま出撃することになるかと思いと親兄弟の顔が自然に浮かんできて、他の事などは一切頭には浮かびませんでした。幸いに舟艇を曳き出して、出撃する事はなく、終戦を迎えました。(阿見町「海軍航空隊ものがたり」より)



132部隊で航行訓練中の二人乗り「震洋」(『独破戦線』ブログより転載)。土佐清水市に残る震洋格納庫跡の前に建つ「震洋特別攻撃隊基地跡之碑」(竹田昭彦日誌HPより転載)

### 肉弾

戸張礼記氏は中学校45回卒。中学4年1学期半ばの1944(昭和19)年6月1日、16歳で土浦海軍航空隊に入隊、甲種14期(2次)生となりました。

戦局が悪化したため、1945(昭和20)年3月、予科練生教育は中止となり、3月15日、三沢航空隊に転隊となりました。戸張氏は三沢航空隊への転隊から終戦までの戦いの日々を次のように語って

くれました。

「午前3時、1000余の予科練生が土浦航空隊を出発、5時10分常磐線土浦駅発の臨時列車に乘車、通い慣れた土浦中学校のあたりに目をやりながら、もう帰れないかも知れないとの思いが浮かびました。

3月とはいえ、三沢は雪に埋もれていました。兵舎は木つ端葺きの平屋で、寝床は木製のベッド、風呂場は木の風呂で、湯はドラム缶で沸かしていました。風が強く、風呂帰りの手拭いがすぐに凍って棒のようになっていました。当時三沢基地には、土浦の同期生約1000人がいましたが、飛行場の整地や飛行機を爆撃から守る掩体壕の造成などの作業に明け暮れていました。トラック用のガソリンも不足していたため、トラックに綱をつけて何人も引張って動かしていました。体力的にもきつい作業でしたが、飛行機に乗れないことに何より失望しました。6月8日、先に土浦から三沢に転隊していた14期前期生を特攻隊員として見送った後も、毎日掩体壕への誘導路整備作業が続いていました。7月14日早朝、米軍の艦載機グラマン数10機の空襲を受けました。群れをなして襲いかかるクマンバチのようで、バリバリという銃撃音の中、夢中で逃げ、基地の方角をふり返ると、10数条の黒煙がもくもくと噴き上がっていました。ドーンと爆発して燃え上がる火柱の中に、エンジンや翼ががっくりと落ちた飛行機(一式陸攻)が見え、その無残な最期が痛々しく、目に焼き付いて離れませんでした。

7月25日、三沢航空隊より大湊海兵团に転隊となり、14期生は特別陸戦隊

に編成替えとなりました。津軽海峡に近い、下北半島の石持納屋という部落の山林に幕舎(テント)を設営して駐屯しました。何もない駐屯地で、まず寝起きする場所から造らねばなりません。トイレは林の奥の方に穴を掘っただけ、洗面・入浴・洗濯すべて小川のほとり、急折れの流し台がいくつか並んであつただけで飯盒炊飯も儘になりました。8月に入ると陸戦訓練が始まりました。陸戦隊の目的は、石持納屋のある海岸一帯に、上陸進撃してくる敵戦車群を迎撃撃破するという、対戦車攻撃訓練でした。迎撃といっても重火器はもろろん小銃もなく、頼りは手榴弾、爆雷などの肉弾攻撃用のものばかりです。海岸線までほふく前進していき、シヤベルで身を隠す蝸壺を掘り、その中に潜んでいて、上陸する敵戦車の下に爆雷(訓練では模擬爆雷)を抱えて体ごと飛び込む対戦車攻撃訓練をやっていました。まさに肉弾攻撃で、憧れのパイロットが遂に土竜(もぐら)になったかと、がっかりしました。戦闘訓練は空襲を避けて夜間に行われました。夏とは言え下北の海岸は寒く、蝸壺掘りは自分の墓穴を掘る思いでした。

8月15日、終戦を迎え、喪失感、脱力感とともに、自分でも気付かぬまま、安堵感と、解放感がじわじわ湧いてくるのを感じていました。しかし、特攻出撃の時、先輩たちは『先に行くぞ、後を頼むぞ』と言ひ遣しました。生き残ってしまった私たちは、帽振れで見送った先輩たちへの申し訳なきで一杯でした。そしてその気持ちは86才の今も消えることはありません。」

(高21回 松井泰寿)